

「社会美」という概念の再検討

北川 翔一

近年、我が国では感性の働きが社会的に注目されている。感性は人間の持つ知覚能力の一つであり、様々な社会的事象においてその作用をうかがうことができる。感性と社会の関わりについて、社会学はこれまでどのようなアプローチを行ってきたのだろうか。社会学分野から感性と社会を考察している先行研究や社会学的な学術動向を把握すべく海外と国内における文献の調査を行った。海外においては、年々感性と社会への論考が盛んに展開されていることが計量的に確認でき、一方国内においては宮原浩二郎による「社会美学」が先行研究として確認できた。

本研究は、社会美学が感性と社会を扱った社会学的研究として適切であるかどうかをリサーチ・クエスチョンに設定した上で、社会美学の背景の理論構成に注目し、理論的分析を行った。なお社会美学とは、人と人との交わりである「社会」において展開される、美的な社会状況（社会美）を考察する学問である。ここでの「美」の概念は、芸術学のような構築された美しさを示すのではなく、美学（感性学）的な美であり、「感性的な快」のことである。（以下、宮原の「社会美学」は、「」を抜いて社会美学と表記する。）

宮原の社会美学は、20世紀前半のアナーキスト・思想家の石川三四郎、存命するドイツの哲学・美学者のベーメ、20世紀初期のドイツの社会学者・思想家ジンメルの諸理論から多くの理論的根拠を求めており、本研究ではそれらの理論と社会美学について、両者の共通点と差異を検討した。石川三四郎については、“社会美学”ということばを日本で初めて発表し、宮原も石川の“社会美学”の特質を「感性的快感の共有」と理解しており、コミュニケーション的行為としての共通性が見られた。しかし、石川の“社会美学”が美を媒介として理想とする社会の構築を試みているのに対し、宮原の社会美学は社会における美の存在を指摘するに留まっており、美を契機とした実践への展望が見られない。ベーメについては、現象学的認識から「味わう」という概念を抽出し「雰囲気」のような日常社会における個人の美的体感の方向性を示しており、共通性が認められる。しかし、「味わう」ことそのものはあくまでも美学の基本である「主観的普遍性」の言い換えであって、「味わう」こと自体が絶対化されており、ある種のイデオロギー性を帯び社会美学の反証可能性を否定している。ジンメルについては、「社交」「感覚の社会学」と社会美学の間に「相互作用」や「社会化の形式」という社会学的な共通性が確認できた。ただし一方で、宮原が社会美学の実践活動としてエッセイを推奨する社会美記述には学術活動としての実践性に疑問が見られ、エスノメソドロジーなどの社会学的研究手法の導入が必要と考える。

よって、社会美学は理論的観点からは感性と社会を扱った社会学的研究としては相応しいと認められるものの、その実践に関しては多くの課題が見られ、今後展開される事例研究を通じ、科学としての実践性・実証性を深く問う必要がある。（指導教員 後藤嘉宏）